

という問いはともかくとして、これらの現象が「従来とは異なる新しい動き」としてうけとめられているらしいことは、確か」だとも述べた。

この「タブーの崩壊」という言葉は、誰がつけたか知らないが、少しジャーナリストイックではあったが、なかなか上手いネーミングだった。もっとも今ここで「タブーの崩壊」を取り上げるのは、何も一九七〇年代の「タブーの崩壊」について改めて論議するためではない。ただ、ひとまずこの「タブーの崩壊」という言葉が、高度経済成長期を境とする日本児童文学の質的変化を表すものとして、当時の児童文学関係者の間に広く認知されていたということを押えておきたい。

*中国児童文学の「タブー」

当時の児童文学関係者達は、「タブーの崩壊」を世界的潮流の一つとして捉えていたようだ。実際、先の特集号では、具体的な作品例として、今江祥智の『優しさごっこ』（理論社）等に並び、旧ソビエトのワジム・フロロフの『愛について』（岩波書店）やアメリカのジュディ・ブルームの『カレンの日記』（偕成社）を複数名が取り上げている。座談会に参加した灰谷健次郎は、「子どもの現実を目をそらしていない作品」は、「外国の本が多かった」と述べている。

つまり「タブーの崩壊」というのは、当時の児童文学関係者にとっては、先進国の児童文学に共通する事象であり、高度に経済発展を遂げた国に暮らす子どもの実態に即した作品の出現を求めれば、必然的に生ずることだと捉えられていたのである。

そのためだろうか、一九九〇年代に入り、中国から児童文学者たちが来日し、交流会等が持たれることが増えると、日本の児童文学者たちは、しばしば中国側に「中国児童文学におけるタブー、そしてタブーの崩壊の有無」をたずねるようになった。日中児童文学美術交流センターは、上海の児童文学者たちと相互に児童文学者の派遣事業を行って、私はこれまでに何度も中国作家との交流会に参加し、時には通訳をつとめてきたのだが、この「タブーの崩壊」という言葉を何回も通訳した覚えがある。

例えば日中児童文学美術交流センターの『虹の通信』（一九九九年八月一日発行・第二十二号付録）には、その春に行われた「中国の児童文学作家との交流会」の報告が載っているが、そこには「題材としての離婚は中国でも多数書かれている。題材はタブーではないと言っているだろう」と書かれている。私はこの会には参加していないが、この交流会でも、日本側から「タブーの崩壊」に関する質問が出たことがうかがえる。

日本の参加者たちは中国の児童文学の現状そして成熟の